

報道関係各位

学校法人 日本女子大学

第二回「平塚らいてう賞」贈賞式が開催される

～顕彰「海南友子氏」ほか～

第二回平塚らいてう賞贈賞式は、2月10日（土）午後2時00分から日本女子大学新泉山館大会議室（目白キャンパス）にて開催され、日本女子大学後藤祥子学長・理事長より、顕彰1件海南友子氏（ドキュメンタリー映画監督）、奨励2件近藤未佳子氏（東京大学大学院）菊池栄氏（立教大学大学院）に対して、それぞれ賞状と副賞賞金が贈呈された。

「平塚らいてう賞」は、「平塚らいてうの記録映画を上映する会」のご芳志をもとに、人生を女性解放や世界平和のための活動に捧げた平塚らいてう氏（1906年日本女子大学卒業）の遺志を継承し、男女共同参画社会の実現および女性解放を通じた世界平和に関する研究や活動に対する顕彰と奨励をはかることを目的に創設したものである。

募集にあたっては、本趣旨を社会に広く伝えまた今後の活動が進展することを願って、全国で研究や活動を行なっている個人または団体を対象としている。

第二回目の今回は、前回とほぼ同様の12件（顕彰4・奨励8）の応募があった。厳選な審査の結果、顕彰1件、奨励賞2件が決定した。

顕彰は、これまで際立った功績をあげた者に授与され、奨励賞は、研究や活動を継続的に行なっている者、あるいは新たに取り組もうとしている者に授与される。

応募内容は、前回同様、若い大学院生からの応募が目立ち、広い視野を持った内容が多かった。とくに「慰安婦」「女人禁制」「家父長制」「町づくりにおける女性の参画」などのキーワードが多く見られた。いずれも女性の人権に関わる注目した問題に関わる研究であり、男女共同参画社会において取り上げられるべき事項であった点は応募者の高い意識が見てとれた。

本賞は、平塚らいてうの精神を受け継ぎ、平和で平等な21世紀の社会を作るために行うものであり、その意味で今後もこれからの社会を担う多くの若い研究者や活動家の応募を期待したい。



< 第二回平塚らいてう賞 受賞者紹介と受賞理由 > は以下の通り。

< 顕 彰 >

受賞者：海南 友子氏 （ドキュメンタリー映画監督）

海南氏は、大学で歴史学を専攻し、社会では7年間、報道ディレクターの仕事をして独立し、ドキュメンタリー映画製作を開始した。2001年、『マルデイエム 彼女の人生に起きたこと』、2004年、『にがい涙の大地から』を次々製作し、世界各地のドキュメンタリー映画祭に出品して評価され、平和・協同ジャーナリスト基金奨励賞(2004年)、黒田清日本ジャーナリスト会議新人賞(2005年)を授与された。氏の作品はいずれも、未だに解決できない戦争と平和の避け難い諸問題を取り上げ、その実情を検証し、問題の重要性を世に訴えている。若い世代に属する氏の発言が映像化され、世に出ることの意義は大きい。さらに氏は、製作映画の基盤となる資料を著作、『地球が危ない』（幻冬社）、『未来創造としての戦後（補償）』（現代人文社）、『ドキュメンタリーの力』（子どもの未来社）にまとめ、映像の背景には真摯な資料研究の存在が不可欠であることを示している。総じて、日本はもとより国際社会で高く評価されるには、氏の持つドキュメンタリー映画製作者としての情熱と技量、優れた歴史感覚、さらに、日本人として女性として、今、考えるべき問題を直視し、「映画」という方法で世に訴える勇気が評価されたのであろう。平塚らいてうが生涯持ち続けた美点と一致するものが、海南氏のドキュメンタリー製作と作品に限りなく見出せる。

< 奨 励 >

受賞者：近藤 未佳子氏 （東京大学大学院工学系研究科建築学専攻）

本研究の優れた特徴は、都市計画と女性の関わりを歴史的社会的工学的視点から探求し、ジェンダーの問題を工学分野において追求するところである。工学分野でのジェンダー研究ともいえ、その斬新性は抜群である。さらに研究の段取りも精密である。たとえば、修士論文で戦前期の東京を取り上げ、ジェンダーと都市政策の研究に取り組んだ後、東京大学21世紀COEプログラムに参加し、戦前期の大阪に焦点を移し、都市環境改善活動と女性の関わりを研究し、今後は研究範囲を戦後期に拡大し、アメリカなど外国との比較研究を構想し、博士論文へと発展させる壮大な研究計画にも期待される。また行政資料、地域・地方資料、女性団体資料、女子大学関係資料など様々な領域の多様な原資料の収集と分析を綿密に行っている点が研究の信憑性を高めている。このことは視点の斬新さとともに評価に値する。

受賞者：菊地 栄氏 （立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科）

現代における出産はあまりにも病院での医療的側面に中心が置かれ、子を産む女性の自然なありようが無視されていることに着眼した点が新鮮である。著書『イブの出産、アダムの誕生』のなかでは、出産の歴史や各国の現代出産事情をふまえ、どういいう出産のありかたが望ましいかを具体的事例をあげながら論じ、出産が人間の自然な営為であることを忘れがちな現代に警鐘を鳴らしている。また菊地氏は出産準備クラスや出産体験の意識調査、生まれたての赤ちゃんの写真展など、多岐にわたる活動を通して女性たちが産むことに関し抱えている問題を捉え、解決しようと努力している。活動と研究の今後の成果が期待される。

以上

顕彰：ドキュメンタリー映画監督 海南友子（かなともこ）氏の受賞スピーチ（要旨）

本日は平塚らいてうという大変大きなお名前のある賞を頂き、ありがとうございました。私は日本女子大学の附属中学、高校、大学と10年以上もここで学んできました。自分自身あまりいい学生だったという思いはありませんでしたので、受賞の一報が入ったときには飛び上がるほどに嬉しかったです。

私は日本女子大学で学んでいる間に二つの大きな教えをいただいた気がいたします。

一つは日本女子大学には平塚らいてうをはじめ、明治、大正、昭和の時代に社会の第一線で活躍された諸先輩がたくさんいたことを附属中学、高校時代に繰り返し教えられたということです。この中で私は自立して生きることを自然に学んだという気がします。

もう一つはどんなに難しい問題にも正面から取り組むことの大切さを教えられました。一番印象的なのは中学の時に、「自衛隊は合憲か違憲か」という問いを出され、一ヶ月かかって調べて自分の意見を言うという宿題を出されたときでした。その最後の授業で先生は答えをおっしゃらずに、こう言われました。「あなたたちが実社会に出て自分の体験から見つけていくものだ。世の中にはそのような問題が一杯あるんですよ」

今私が取り組んでいる仕事（ドキュメンタリー）はとても地味なものです。重いという人もいます。華やかではないと批判も受けることがあります。また「戦争なんかなくなるならない」という批判も受けることがあります。自分自身ときに挫けそうになることがあります。そんなとき私は日本女子大で女性の参政権や権利のために力を尽くした先輩達を思います。彼女たちはこの運動に一生を尽くしたにもかかわらず、女性に参政権が出来た社会を見ることなく亡くなっておられるはずで

す。現在戦争は無くならないかもしれません。ですが、自分が亡くなった後、50年後か100年後、あるいは300年後戦争のない世の中ができるかもしれません。私はそんな小さな希望を、日本女子大学で学んだ「どんな問題にも正面から向き合って考える」という姿勢で日々活動を続けています。

本日はどうもありがとうございました。

*尚、海南氏はこのたび「サンダンス・NHK国際映像作家賞 日本部門2007」を受賞されたこともあわせて報告されました。上記の賞は、次世代を担う新しい映像作家の発掘と支援をつうじて、世界の映像文化への貢献と文化交流をめざすために作られました。

問い合わせ先 日本女子大学 広報渉外課

電話:03-5981-3162・3163

FAX:03-5981-3164